

太田浩史

民藝
他力の美

東本願寺出版



河井寛次郎「百花碗」

民藝とは

無名の職人の仕事は、同じ品物を安く大量に作らなければならないので、美への作為をさしはさむ余裕がありません。でもそれが幸いして無心の仕事が成り立ち、自然な素材と伝統技術の反復によって作者が意図しなかった美しい品がやすやすと生まれます。

柳宗悦はそうした仕事を「民衆的工藝」(Folk craft)と名づけました。「民藝」はその略称です。それは美を追わない仕事ですから「純粹美術」(Fine art)とも「民衆芸術」(Folk art)ともちがいます。柳は「民藝」と同じ性質をもつ存在を信仰の世界に見出しました。真宗の妙好人がそれです。

妙好人は非凡な修行者ではなく、無名の凡人です。信心に作為を入れる力もないので、生活のなかで無心に念仏するのみです。しかし自力の貧しさが幸いし、かえって他力が豊かにはたらい、大きな救済がその人におとずれます。そしてその人とともに暮らす私たちも救いの恩恵にあずかることができるのです。

「純粹美術」と「民衆的工藝」の対比は、信仰の世界における「聖道門」と「浄土門」の対比と一致します。柳はそこに「美信一如」の法則を見出し、「民藝品」を「妙好品」と言い、美醜葛藤の彼岸にある美しさを「他力美」「浄土美」と称するようになりました。そして1948年、城端別院(真宗大谷派善徳寺)で『大無量寿経』に説かれた四十八願の中の第四「無有好醜の願」に、美醜の二元対立が無い世界が説かれてあるのを発見し、『美の法門』を著して「仏教美学」を宣布しました。それは『大無量寿経』に説かれた美の教学(Insight into Beauty)とすべき意味です。

「美しさ」との出会いが初恋(Love at first sight)のようなものです。ほとんどの人は事実を憶えていても内容は輪郭しか覚えていない。意識を超えた体験はつかみようがないからです。しかし、わからないままでも初恋を原動力に生きる人はいるし、「美しさ」が宿った品を伴侶として暮らしを営む人はいるものです。

民藝の思想は東洋的知性から生まれました。それは物を対象化しない認識方法です。物と自分を区別し、その物をさらにほかの物と比べて分析するというやり方は、人ならぬAIも得意になって真似をしますが、東洋では伝統的に浅はかなこととされてきました。民藝思想の「直観」「不二」「無事」といった言葉は、物を対象化する以前のところに心を置くことを意味します。それを人に伝えるのは容易ではありませんが、民藝の強みは物という証拠を媒体にできることです。日本をふくめて最近の東洋諸国の振舞いには、どうも東洋的知性の香りがしません。極東や中東はかつてすばらしき美の王国だったのです。みんなですれ取り戻そうじゃありませんか。

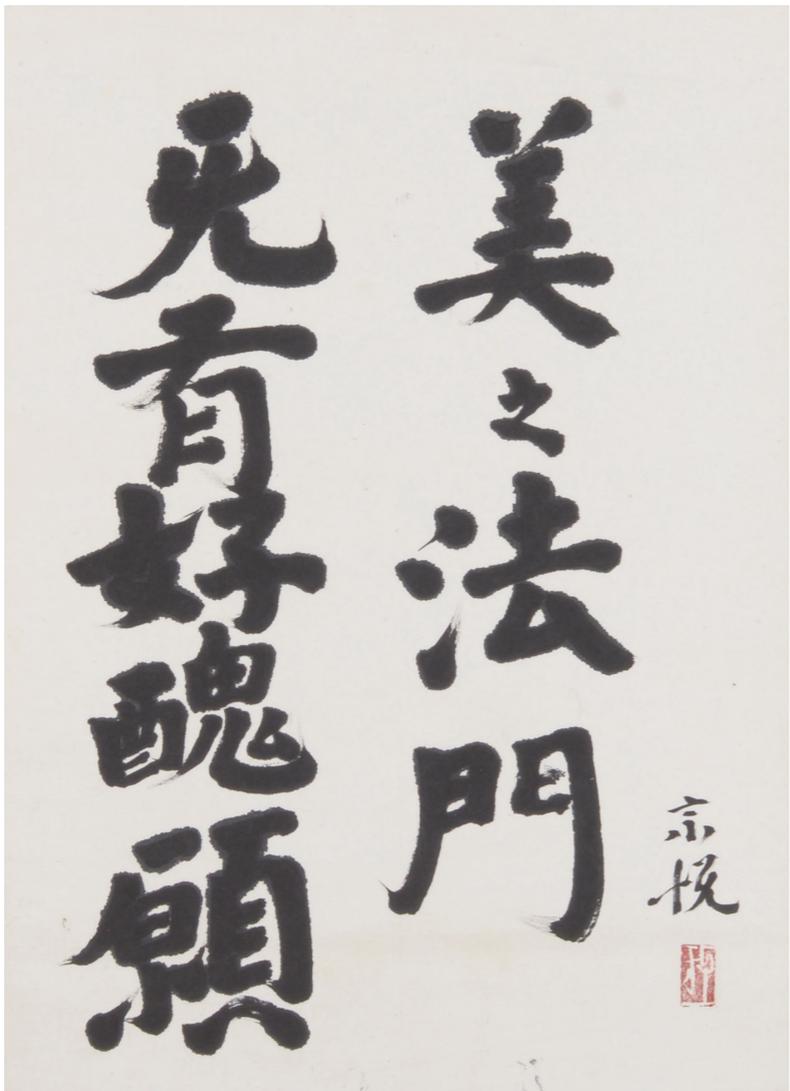
故安川慶一富山民藝館長が教えてくださった言葉に、「誰でも民藝館をつくれる」というものがあります。「一年に二つほど自分が本当に気に入った民藝品を買うことだ。そうすれば三十年後には六十点になる。よい民藝品を六十点も展示すれば、すでに一流の民藝館だ」というのです。それを心がけて五十年近く物を集めてきたので、お金とは疎遠な私でもそれなりに納得できる展示ができています。この書に取り上げた品々は、ほとんどその展示の中から、私の心が動くままに選んだ物です。その物たちを見ているうちに、自然に言葉が湧いてきました。したがって、あまり秩序だっていないことをお許しください。しかし、これは無計画の計画でもあります。

私のところは関東の長屋門を移築して展示に使っているのですが、最近はお疎で周囲に空家が目立ってきました。どれも立派な和風の古民家なので、いつものこと全部民藝館にしたらいいと思うのです。民藝品を置くだけですから、たいしてお金はかかりません。空家を全部プチ民藝館にして、百館ぐらい構えれば、ずいぶん壮麗な地域になりそうです。美しい品が人口を凌駕すれば「美の王国」です。それには過疎地のほうが断然有利です。

民藝館は民藝品を展示する美術館ではなく、本当の民衆の暮らしを見てもらう施設です。そこで宿泊したり、食事できるのが理想なのです。民藝品の美しさは使って語らうのが極上の味わい方です。それと教育の場に民藝を取り入れることです。私は物心ついたときにはすべて民藝品で食事をしていましたから、どうい物が民藝品であるか、考えなくても肌でわかります。この考えなくてもわかるという事が文化の正しい認識方法なのです。学校給食の食器は全部民藝品。食材は全部自然農法。たったそれだけのことで、過疎や災害で疲弊した日本の地域は根底からよみがえることでしょう。

最後に、この場をお借りして、若松英輔氏より当書に対してとても深い思索より寄稿をいただいた事、また日本民藝館より写真の提供をいただいたことに深い謝意を表します。おかげさまで意義深い本ができあがった事を歓喜する次第です。

太田浩史



柳宗悦「美之法門 無有好醜願」

はじめに 民藝とは……………	2		
民藝と棟方志功……………	8	カントリーチェア……………	40
上手くそ……………	11	バーナード・リーチ……………	43
民藝と真宗……………	12	緋の美……………	44
柳宗悦……………	15	編組品……………	47
ノクシカタ刺繍……………	16	朽木酒上……………	48
民画……………	19	下手物……………	51
韓国の美……………	20	猫の目……………	52
信の美……………	23	他力……………	55
他力美……………	24	イランの美……………	56
行燈皿……………	27	アフリカの美……………	60
濱田庄司のお手本……………	28	未分化の美……………	63
根に聞いて芽を出す……………	31	台湾の美……………	64
炎の詩人・河井寛次郎……………	32	古代の美……………	68
木喰仏……………	35		
すばらしき沖繩……………	36		
芹沢銈介……………	39		
対談			
他力によって「ほんまもん」が生まれる民藝の世界。			
太田浩史×松井健……………	72		
寄稿			
美の扉が開かれるとき 若松英輔……………	86		
掲載作品一覧……………	92		

民藝
他力の美

目次

民藝と棟方志功

棟方志功は青森の鍛冶屋の息子でした。頑固一徹で貧乏暮らし、そんな父の職業を継ぐよりゴッホのような絵描きになりたいと思いました。「わだば、ゴッホになる！」と気負いこんで上京したものの、その粗削りな描きっぷりを評価する人はいませんでした。無名だった棟方の板画（たんなるプリントではなく、木の命を尊重し、その魂を彫り出すという棟方の造語）をはじめて認められたのは、民藝運動の創始者柳宗悦でした。本能むき出しの無技巧な作風に民藝と通じるものがあつたからです。

1936年、棟方は破格の値段で買ってくれた柳に『大和し美はし』という大作を届けました。すっかり緊張しきって部屋に通された棟方は、そんな気張りが吹き飛ぶような驚きと出会いました。

「部屋の正面に、どっかりと踞っているものがありました。大した瀬戸ものの大鉢がおかれてあつたのです。わたくしはしばらくじっとこの大鉢に見ほれていました。先生がそばにいろのを忘れてしまったように、わたくしは、その大鉢に吸われていました。どんな名人があつて、こんな大したものを作つたのか。わたくしは興奮して、がんがん心臓が鳴ってきました」『板

